一人ひとりのニーズに即した教育の保障を願って　その３

新井　靖子

前号で各教科の先生達の授業への関わりについて紹介したが、授業のあとには評価がつきものである。支援級の生徒たちにももちろん通知表はあった。しかし、通常級と同じ形式の通知表では生徒たちの日々の学習に取り組んだ成果や努力、理解したことや新たにできるようになったこと、などなどを本人が振り返り次の学期のやる気につなげることや学校での姿をご家族に伝えることはできない。そこで、教科や分野ごとに取り組んだ学習課題に合わせて到達度やとりくみの姿勢が生徒自身にもわかりやすい学級独自のものを作った。生徒自身の自己評価の欄やご家族の感想や励ましが記入できる欄も作ったので１０頁を超える冊子になった。現物は毎年生徒たちが家庭に持ち帰ったので、私の手元にない。だからあまり具体的なことが書けないが、この学習の記録票は授業に関わってくださった先生達からの評価もお願いしたので、先生方の負担になったことは確かだがありがたいことに皆さん協力的だった。

評価について一つだけ深く心に残っていることがある。各評価項目を到達度に合わせて、○△×の三段階［○＝しっかり理解できた　できるようになった　×＝理解できない　まだできない　△＝その中間］で表そうとして提案した。ところが校長先生から「待った」のお声がかかり、「×を付ける必要はないのではないか」と。確かに私もずっと以前から「１」が並んだ通知表を受け取る子どもや両親の心中を察すると相対評価は全く励ましにならないと思っていたにもかかわらず、到達度評価で×の刻印を付けてしまうことの意味をあまり深く考えていなかったことを恥じた。

評価項目が空欄になっているところは、「取り組めなかった課題か、まだ難しくて理解できていないこと」として受け止めてもらうよう保護者にも理解を求めた。

当時、特殊学級（支援級）の教育は生徒の実態に即して中学校の教育課程、養護学校（支援学校）の教育課程どちらに準じてもよかったので、一人ひとりの希望を確かめながら可能な限りそれぞれに即した計画で日々の学校生活を組み立てていた。

そんな中ですべてがうまくいったわけではなく配慮が足りなかったと後々反省することになった例もある。Ｓさんは、明るくて行事やどの教科の学習にも真面目にとりくみ、友だち思いの優しい少年だった。学習意欲も旺盛で自分からいくつかの教科を選んで通常級で授業を受けていた。支援級全員で取り組む遠足や版画のカレンダー制作など、グループに分かれて活動する場合の班分けの話し合いでは、遠慮がちではあるが誰かに推薦されればグループのリーダーに立候補し、誠実に役割を全うしようとする責任感の持ち主でもあった。しかし、３年生になった頃から通常級で受ける授業の前の休憩時間に、授業の準備をして支援級の教室は出るものの途中の手洗い場で石けんを付け丁寧に手を洗う彼の姿を見かけるようになった。「そろそろチャイムが鳴るよ」と声かけするとそそくさと教室へ向かい、行くのがいやだとか、行ってもつまらないから行かないという素振りを見せることはなかった。１・２年の頃に比べ友だちや若い先生相手にふざけ合うことも少なくなったが、あまり気に留めることもなく上級生になって落ち着きが出てきたのだろうと考えていた。

卒業後はサポート校に進学したけれど、体調が思わしくないので通院されていると聞きハッとした。中学時代のあの手洗い行動は、疲れてもういやだ！というサインだったのではないか？それを受け止め、気持ちを楽にしてあげる学校生活の改善を本人、ご両親と一緒に考えるべきではなかったかと、今も折に触れて思い出す。あんなに健康だった少年が、何度も入退院を繰り返し、現在も仕事に就くことも叶わず、訪問医療を受けながらお母様の支えで暮らされていることを伺い、心が痛む。

卒業生達のその後の生活をたどってみると日常生活はほぼ自立している軽度の人たちの方が、生活が不安定で苦労されている人が多いと感じるのは私だけだろうか。もちろん逞しく生きている人たちもたくさんいる。近頃は、我慢して頑張り過ぎないように、「助けて」「わからないから教えて」を上手に使える人になってほしいと願っている。